

TAMI主催の商談会で有意義な交流 強固な連携体制を

台湾機械工業同業公会(TAMI)は6月8日と10日の2日間、毎年恒例の「日台機械連携商談会」を開催した。8日は東京都港区の機械振興会館で、10日は名古屋市中村区のウインクあいちを会場とし、それぞれ20社以上の台湾企業が参加した。日本からは機械メーカーや商社などが出席し、新たな商談が生まれる場となった。

交流を深める

今年で11年目となる日台機械連携商談会は、日本と台湾の製造業の交流を目的とする。TAMIの黄立翰理事は開会式で「日本と台湾で協力し、対応力と強じん性に優れたサプライチェーンを構築できれば」と語った。また共催団体の機械振興協会から青木朋人常務理事が、日本工作機械輸入協会から勝又峰行専務理事があいさつした。

台湾の製造業は、全体では半導体関連がけん引役として好調な一方、工作機械市場では厳しい状況が続く。為替や中国企業との競争激化を背景に、昨年は輸出が大きく落ち込んだ。黄理事は「ロボットや半導体、防衛関連の成長市場が今後の景気上昇

の鍵。また複数の企業間で連携し、生産ラインを一括提供する動きも活発化している」と話した。

商談会の参加企業は、そうした台湾企業同士の提携に加え、日本企業との協業や取引にも積極的な姿勢を見せる。今回はより有意義な商談となるよう、日本と台湾の双方に対し、TAMIが事前に入念なヒアリングをしたという。その効果もあり、台湾企業からは「複数社と具体的な話をできた」との声もあった。

情報発信も強化

参加した台湾企業は工作機械メーカーだけでなく、周辺装置や工具、機械部品などのメーカーもあり幅広かった。自社の製品やサンプルワークを持ち寄る企業はこれまでも多かったが、日本語に



「日本と台湾で戦略的な補完関係に」と語る黄立翰理事

訳した会社紹介の資料を用意する企業が一層増えたことから、台湾企業の熱意がうかがえた。

テレスコカバーを製造する台中市の添鼎興業は近年、情報発信に力を入れる。王彦霖営業マネージャーは「情報収集に人工知能(AI)技術を使う人が増えているため、その情報源となるように、インターネット上で自社の強みなどを発信する重要性が上がっている」と語った。この取り組みや商談会の効果もあり、日本企業との取引が増えているという。

新北市の中国砂輪企業は、研削砥石(といし)や、ウエハーの化学機械研磨(CMP)用ツールなどを製造する。台湾の上場企業で、従業員数は約1700人。台湾積体回路製造(TSMC)などと取引があるという。工場が台湾に5カ所、タイに2カ所あり、日本では埼玉県入間市にある。「日本向けの販売はまだ少なく、新規開拓に力を入れる」と白文亮副社長は話す。

(水野敦志)



20社以上の台湾企業が参加した



商談会が新たな取引につながっている